

〈資料紹介〉 静嘉堂所蔵『西域出現古経断片帖』所収「護法神王図」

—いわゆる「行道天王図」との関係を中心に—

大沼 陽太郎

毘沙門天が眷属を連れ、水上を遊行する。こうした図像は後述するように敦煌莫高窟出土絵画に見られ、「行道天王図」と呼称される。この「行道天王図」は唐末〜五代・北宋（九〜十世紀）とされる作例が数例知られるのみであった。

しかしながら、静嘉堂に所蔵される『西域出現古経断片帖』の中には、遼時代のものと考えられる、眷属を連れて水上をゆく版本の護法神像の姿を見いだすことができる。

この断片帖については西脇常記によりすでに詳細に紹介されている（註1）。また西脇は「護法神王図」についても、契丹蔵（遼蔵）および金蔵に付される扉絵の特質を明らかにしている。

本稿は西脇によつては触れられなかった「護法神王図」の図像的性質について「行道天王図」との類似を指摘し、これまで明らかではなかった「行道天王図」の展開を示す資料として提示するものである。

一、断片帖の概要

『西域出現古経断片帖』については前述のように西脇による紹介があり、それ以前にも荣新江が各帖所収の断片を総覧している（註2）。そのためここでは簡略に概要を述べるに留め、静嘉堂への伝来経緯など些かの情報を付加したい。

『西域出現古経断片帖』（函架番号…一〇五函十二架）は、經典断片などを台紙に貼り付けた断片帖である。八帖からなり、一帙にまとめて保管されてい

る。帙には「西域□□□□断片帖 八本」と記す箋が付され、第一帖の上に「西域出現古経断片帖 八本」の題箋が付属する。第五帖のみ法量がやや小さく、独立した帙と外題が付く。

各帖とも折帖形式で、厚さ約〇・二mmの台紙片面に經典断片を貼り付ける。見開き（二面）ごとに頁数と見開き内の収録断片数を墨書する（例「第十三頁共四紙」）。

各帖の法量は、第五帖以外が縦三一・三cm、横一七・四cm（閉じた状態・表紙含む）、第五帖が二六・三cm、横一六・〇cmである。

また各帖には、白地に黒で巾繫ぎ（紗綾形）文を表す織物に被われた表紙が付く。いずれの帖の表紙にも、以下に示す題箋が貼り付けられ、加えて静嘉堂の管理番号と「YK3171」と記されるラベルが貼り付けられる。

第一帖「北魏以来写経残字（出吐魯番素文珍蔵）八十五」

第二帖「晋宋以来印版蔵経（出吐魯番素文珍蔵）八十七号」

第三帖「六朝以来写経残字（庚戌仲冬素文蔵）八十四号」に朱文円印

（「号」字は題箋と表紙本紙にかかる）

第四帖「六朝人写経残字（辛亥十月吐魯番出土素文題）八十一号」に朱文円印

第五帖（外題）「六朝準部写経残字（辛亥秋素文）」に朱文方印

第六帖（内題）「六朝準部写経残字（辛亥秋素文）」に朱文葉形印

第六帖「高昌出土写経残字（宣統辛亥六月素文珍蔵）八十二号」

第七帖「高昌出土刻経残紙（辛亥初秋玉書書）八十八号」

第八帖「古高昌出土残経(辛亥七月素文題)八十三」

〔三〕二字は「二」あるいは「七」と記した上から太い字で上書きする)

各題箋には「八十一」から「八十八」の数字が付される。この数字の順番は現在の静嘉堂の管理番号とは異なるが、本稿では便宜的に静嘉堂における管理番号を用いる。

第三帖に「庚戌仲冬」、第四帖に「辛亥十月」、第五帖に「辛亥秋」、第六帖に「宜統辛亥六月」、第七帖に「辛亥初秋」、第八帖に「辛亥七月」の年紀が記される。第六帖に「宜統」とあるため、清・宜統二年(一九一〇・庚戌年)および宜統三年(一九一一・辛亥年)に断片帖は作られたものとみられる。「素文珍藏」「素文題」などと記される「素文」は、新疆の財務官であった梁素文の旧藏品であることを指す(註3)。西脇によれば、梁素文旧藏品は、中国国家図書館や東京大学総合図書館等にも確認されているという(註4)。

加えて、例えば第一帖第六頁において「此与前葉書法同為一紙/頗似鍾元常荐李直表/永恩記」「永恩(朱文楷印)」とあるように、清末に新疆莎車県(ヤルカンド)等の知事を務めた段永恩の跋文が傍に付される頁もある。

なお静嘉堂の典籍受入台帳(「静嘉堂文庫圖書登録簿」Ⅵ、八七頁)の本帖の備考欄には「男爵御手許ヨリ入。黒板勝美博士ヨリ購入ノモノ」と記される。この記述は黒板勝美(一八七四―一九四六)より購入したもので、もと男爵(岩崎小彌太(一八七九―一九四五)か)の手元にあり、のちに静嘉堂に入ったことを指すものと思われる(註5)。ただし同登録簿に年紀はなく、受入年代は不明である。なお、榮新江は静嘉堂文庫元司書・増田晴美よりの伝聞として岩崎小彌太が一九三五年前後に中国書商から購入したものと記すが(註6)、少なくとも購入元の情報は誤伝によるものである。

二、護法神王図

第八帖(「古高昌出土残経」)の十三頁に護法神王図一片が貼り付けられる【口絵5】。断片の法量は縦一六・八cm、横一四・六cmである。断片は波形の

界線によって画され、内部に像が表される。左端には武装像の上半身の左半分が残り、右脇に眷属が、背後に水景と山景、その上に空中を花が飛ぶ。武装像は火炎のつく頭光をとめない、天冠を被る。冠繪が風にはためき、口元には髭が確認できる。眷属は山羊のような二本の角を有し、牙を下出し、長大な棒状の武器を右手にもち肩に担ぐ。武装像、眷属像とも雲氣に包まれ、眷属像を包む雲氣は右奥方向に続いている。

また第五帖(「六朝準部写経残字」)十五頁の右下には、第八帖の護法神王図と同様の波状の界線を有する断片が確認できる【口絵6】。断片は最も下の大断片と、その上部に付随する類似の色と質感を有する三つの小断片からなり、大断片の法量は縦一一・四cm、横一四・六cmである。大断片には杳と吊腿(脚絆)、袴を着けた二つの脚、そして台座が見え、武装像の脚部と台座と考えられる。台座中央には武装像の帯の先が垂下し、台座前の足下には角形や球形の宝が配される。

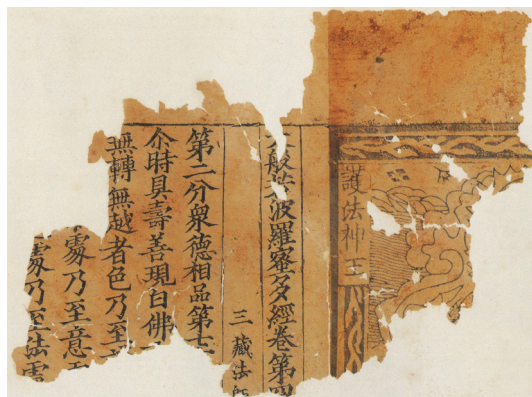
これらの二つの断片は、台東区立書道博物館の中村不折蒐集資料と同版と見られる断片が確認できる。まず中村不折蒐集資料の『晋唐屑玉雜卷』(No. 170)第十九片「大般若波羅蜜多經卷第四殘片」【挿図1】は、静嘉堂断片にはない右上部が残り、波形の界線の形状が一致する他、水景の波線の間隔、空中を飛ぶ花や宝、雲氣の表現などが極めてよく類似する。書道博士には「護法神王」の墨書があり、この武装像が同名で表されたことが確認できる。また続く『大般若経』の字数や文字数は契丹蔵のものと考えられている(註7)。

またロシア科学アカデミー東洋写本研究所蔵西域・西夏出土資料のうちTK274とTK275【挿図2】、TK11572【挿図3】、TK11576【挿図4】も図柄が一致する。このうちTK274とTK275は黒水城(カラホト)の出土品である。TK274には「仏説長阿含經第四分世記經阿須倫品第六」と題が続き、西脇によれば紙背に「長阿含經卷第二十 薄」とペン書きがあり、千字文帙号との対照から契丹蔵のものであることが分かるという(註8)。なお以上の類例は、西脇によりすでに指摘されている。

加えてベルリン・トルファンコレクションのCh/U7731【挿図5】も図様が細部まで一致し(註9)、Ch/U8143には類似する界線と「護法神王」銘が見ら



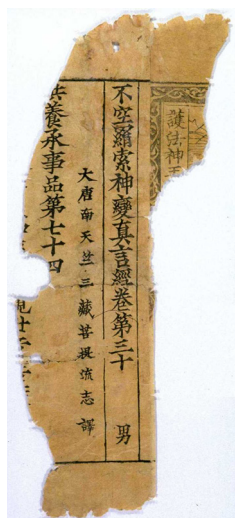
挿図5 ベルリン・トルファンコレクション
Ch/U7731



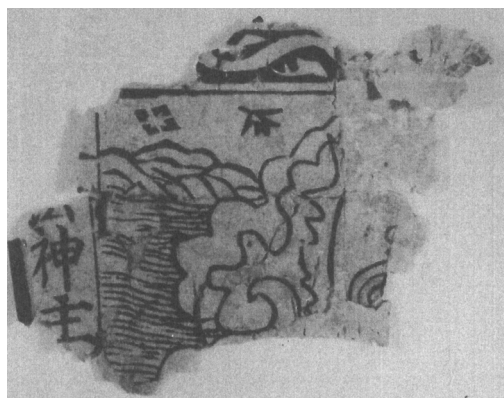
挿図1 台東区立書道博物館蔵『晋唐屠玉雜卷』(No.170)
第19片「大般若波羅蜜多經卷第四殘片」



挿図7 旅順博物館旧蔵
断片
「□(法)神王」銘



挿図6
ベルリン・トルファン
コレクション Ch/U8143



挿図2-1 ロシア科学アカデミー東洋写本研究
TK274



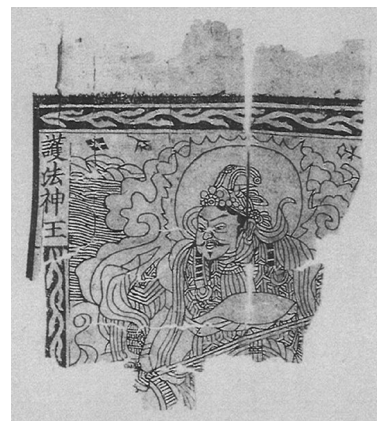
挿図8 旅順博物館旧蔵断片



挿図2-2 ロシア科学アカデミー東洋写本研究
TK275



挿図4 ロシア科学アカデミー東洋写本
研究所蔵 Dx11576



挿図3 ロシア科学アカデミー東洋写本
研究所蔵 Dx11572



挿図10 メトロポリタン美術館蔵「観音経絵巻」巻末
鎌倉時代・正嘉元年(1257)



挿図9 京都国立博物館蔵『金剛経』扉絵

れ、これに『不空羂索神変真言经』冒頭が続く【挿図6】^{註10}。

また、戦前に旅順博物館に蔵されていた大谷探検隊収集断片のうちにも同一の界線と「□(法)神王」銘を記す断片【挿図7】、および足下部分と眷属部分の断片【挿図8】が確認できる^{註11}。

この静嘉堂本と同版ないし酷似する版による「護法神王」像(以下、静嘉堂類本と呼称)は、いずれの類例も筆者未見のため紙質や紙継ぎについては不確定な部分もあるが、描線は細密で線の太さが均一であり、カスレやツブレもなく、版画技術が飛躍的に向上した五代から北宋以降の版画の特徴を見ることがができる^{註12}。

こうした護法神像は、北宋時代以降、經典の冒頭あるいは巻末に付されたものであることが現存例から確認できる^{註13}。まず京都国立博物館蔵の北宋時代(十一世紀)とされる『金剛経』冒頭には神王像と眷属像【挿図9】が表される。またメトロポリタン美術館蔵の「観音経絵巻」は奥書から、南宋・嘉定元年(一一〇八)に雲間(江蘇省松江)の銭仲虎により開版された版本を元に、鎌倉・正嘉元年(一二五七)に菅原光重が経文を筆写したものと知れるが、その巻末には前述の『金剛経』冒頭版画と同構成の神王像と眷属像が着色で描かれる【挿図10】。加えて明清では經典巻末には韋駄天像を配することがあるが^{註14}、高麗には韋駄天の如く金剛杵をもつ力士像を巻頭に配する例が確認できる^{註15}。

静嘉堂、書道博物館、ロシア、ベルリンに所蔵される断片は、こうした經典冒頭あるいは巻末に付される護法神王像であり、前述の通り付随する版本經典から契丹蔵のものである可能性が高い。なお西脇によれば諸処に蔵されるトルファン出土經典群の九〇%以上は契丹蔵が占めるといふ^{註16}。

契丹蔵に付される類似的護法神像としては、山西省応県の仏宮寺、通称「応県木塔」の釈迦如来坐像の胎内より一九八四年に発見された經典群のうち、『大方広仏華嚴経』卷四七に付される扉絵【挿図11】があげられる。この護法神像は斜め向きで水上を向かって右から左へ、右方に長く尾を引く雲に乗って進み、足下には貝のような宝と「人」「天」「王」などの文字が散らされる。また河北省唐山・天宮寺塔出土の契丹蔵『仏説阿弥陀经』冒頭には、応県木塔



挿図12 河北省・唐山天宮寺塔出土
『仏説阿彌陀經』扉絵



挿図11 山西省・応県木塔
釈迦如来坐像胎内納入
『大方広仏華嚴經』卷47扉絵



挿図13 大宝集寺本『仏説菩薩本行經』扉絵

扉絵と同様に向かって斜め左を向いて立ち雲に乗り、山景および空中の花、その下に三本線(水景か)を表す「護法善神」銘像が付される【挿図12】(註17)。さらにチベットのサキヤ寺(薩迦寺)北寺から見いだされた、元・憲宗六年(一二五六)に燕京・大宝集寺で摺られた版経のうち(註18)、『仏説菩薩本行經』の扉絵には、静嘉堂類本と同じ図像構成をとる像が表されている【挿図13】。このように静嘉堂類本は、契丹蔵の扉絵と水景の存在において一致し、その図像構成、すなわち、①水景、②山岳景、③異形の眷属、④空中および足下の花や宝、⑤脚を投げ出すようにして倚座する体勢、は大宝集寺本にも見られることが分かる。

このうち④は北宋・南宋の護法神像にも見られる特徴であり、③も群像の中に一部みられるが、それ以外は宋や他地域の護法神像には見られない特徴である。

三、行道天王図との類似

この水景や山景が表される護法神王像と類似するのが、いわゆる「行道天王図」である。

絵画作例では、敦煌莫高窟よりスタインとペリオが請来した絹本画、大英博物館蔵Ch.0018(スタイン絵画45)【挿図14】およびCh.xxxvii.002(スタイン絵画26)【挿図15】、ギメ美術館蔵MG.17666【挿図16】が知られる。

Ch.0018は、背景に青・緑の山々が見える大きく広がり白波立つ水景の上に、小豆色の長く尾を引く雲に乗った毘沙門天と眷属が斜め向きで描かれる。中央の尊格は掌を上にする左手から発する雲気の上に宝塔が浮かび、肩からは炎が出で、頭には三面の冠を着けることがら毘沙門天と分かる。毘沙門天は右側に歩行し、それを功德天と思われる眷属が先導する。毘沙門天の後ろには婆藪仙のような老相の眷属、鎧を着けた三目の鬼形の眷属、官人形の眷属、胡人風の眷属など、計九尊が侍り、最後尾の眷属が大きな旗を掲げる。胡人風の眷属は、弓箭を構えて上方を見るが、その視線の先には画面右上方、蝙蝠のような羽をもつ鬼が飛んでいる(註19)。画面右上には短冊形が配されるが題記はない。なおCh.0018に図像が酷似する白描粉本がフランス国立図書館ペリオ敦煌文書P.5018(1)に伝わる註20。Ch.xxxvii.002では、上端部に山景、下方には水景が確認できる。その中央、画面全体に赤色の隈取りにより表された雲気が充滿する上に、裾の長い金鎖甲を着け、白馬に乗って斜め後方を振り返る像が中央に描かれる。この像は肩から出る炎や三面の冠を被ることから毘沙門天と考えられる。毘沙門天の周囲には、鎧を着た眷属が十一、笏をもつ官人形の眷属が一、手を合わせる女



挿図16 ギメ美術館蔵 行道天王図 (MG.17666)



挿図15 大英博物館蔵 行道天王図(Ch.xxxvii.002)



挿図14 大英博物館蔵 行道天王図 (Ch.0018)



挿図17 大足石窟北山5号龕

性形の眷属が一の計十三体が取り巻き、最も近くの鎧を着た眷属が大きな旗を掲げる。画面上方には一字の堂舎が描かれ、空中には花が飛ぶ。下方の水の中には子供が三体描かれ、紅蓮華が浮かぶ。水景の右下には摩竭魚が口を開け、その傍らに小さな女性形像が捧げ物を持って毘沙門天を見上げる姿が小さく描かれる。水中か雲中かはつきりとしなが、金色の銭貨、火炎宝珠が画面下方に多数表される。画面上方の短冊形には「施主徐漢榮一心供養／水路天王行道時」と題記される。

MG.17666は、像の構成はCh.0018とほぼ同じである。特徴は、毘沙門天と眷属が乗る、赤色の輪郭線に依って描かれた雲が長く尾を引いた先に、山の狭間に立つ関所のような大樓閣が描かれる点にある。本図にも短冊形があるが題記はない。

こうした遊行する毘沙門天像については、早くに松本栄一が着目している(註21)。松本は『貞観公私画史』『圖書見聞志』『益州名画録』『宣和画譜』に見える「行道天王」「遊行天王」「過海天王」という画題に着目し、これをこの三図に比定した。その上で『長阿含経』『大樓炭経』『起世経』『起世因本経』の四天王品に説かれる自身の城がある山から出て池を渡り、夜叉を連れて領園を遊行する天王に当てた。加えて松本はCh.0018に描かれる飛行する眷属がトルファン・ベゼクリク石窟に確認され、水景は描かれないものの眷属を連れる像(第四号窟像(註22)があることを指摘する。

また四川盆地にも、大足石窟北山5号龕【挿図17】や十一号龕、夾江千仏岩一三四号龕、一〇七号龕など、複数の毘沙門天眷属像が存在する。大島幸代はこれらを通覧し(註23)、唐末から五代には、勢力を得た軍閥君主が自身の理想の姿を毘沙門天に重ね、弥勒と共に造像したことを論じている(註24)。なお四川の作例には彫刻ということもあって水景は描かれませんが、夾江千仏岩のように重要な水路の崖に刻まれるなど、大島の指摘するように水上交通や水と関連する場所に造像されることが多い(註25)。つまり環境そのも

のが水景であると言える。また大足石窟北山五号龕や夾江千仏岩一五九号龕の眷属の一体が炎髪を二つの角状に逆立たせ、棒状のものを担ぐ、あるいは持っている点は、静嘉堂類本との関係上興味深い。

これらの作例と、さきに述べた静嘉堂類本の図像的特徴を照らし合わせてみたい。

①水景、②山岳景、③眷属、は敦煌莫高窟よりもたらされた「行道天王図」三幅に共通する特徴である。また山羊頭で大きな棒状のものを持つ点は、大足石窟北山五号龕や夾江千仏岩一五九号龕など四川の石窟に類例が見られる。

④空中および足下の花や宝、の要素はCh. xxxvii: 002に見られる。Ch. xxxvii: 002では空中に静嘉堂類本と類似する花々、眷属らの足下に炎炎宝珠と銭貨が散らされる。

⑤倚座形、の要素は「行道天王図」には見られず、むしろ先述の宋代の版経に付される版画に類する。

このように静嘉堂類本の図像は敦煌出土の「行道天王図」および四川の毘沙門天眷属像に類似する点が多い。

また契丹蔵に付される護法神像全体で見ても、「行道天王図」との類似点



挿図18 奈良・朝護孫子寺蔵「毘沙門天像」

は多い。まず応県木塔出土の『大方広仏華嚴経』卷四七扉絵は、宝が散らされる点がCh. xxxvii: 002と類似し、立ちこめる雲気が画面下方全体を被う点も共通する。また唐山・天宮寺塔出土『仏説阿弥陀経』扉絵はその向かって左向きに動く姿勢や構図がMG.17666に類似する。

四、類似の意味

以上の検討により、静嘉堂類本を含む契丹蔵の「護法神王」像が、「行道天王図」と図像的に類似することが確認できた。

毘沙門天に眷属が付き従う群像は、造像年代の比較的限られる四川の石窟にすでに確認でき、また經典に付される絵画としても前述の通り遺例は少ないが宋代に確認できる。「行道天王図」は松本栄一が指摘する通り宋代の画論に画題として見られ、經典扉絵にもそうした流行の中で取り入れられたのだろう。一方で敦煌出土の「行道天王図」三幅は、画風から唐末〜五代・北宋（九〜十世紀）とされるが、その根拠は必ずしも明確ではない（註26）。筆者は三幅とも実見していないため判断できないが、そもそも契丹蔵の出土場所がトルファンやカラホトであり、これら「行道天王図」も敦煌からの請来品であることには注意が必要であろう。特にCh. xxxvii: 002と応県木塔の『大方広仏華嚴経』卷四七扉絵との、雲気を充滿させ足下に宝を散らす画面構成の類似を見ると、敦煌出土「行道天王図」の一部が遼に関連する可能性も考えておくべきではないか。

静嘉堂類本の図像が元・憲宗六年（一二五六）に摺られた大宝集寺本にも踏襲されていることは、行道天王図が遼から金を経て元に至る北方の王朝の仏教のなかで保存されたことを示唆する。奈良・朝護孫子寺蔵「毘沙門天像」【挿図18】は元時代の作とみられているが、毘沙門天が二眷属とともに遊行する様を描く。こうした作例も、松本栄一が列举するような宋代画論における「行道天王図」の流行の残影とも取ることができる一方で、契丹蔵において同様の図像が保存され、元時代まで影響を繋いだという可能性も考えられるだろう。また静嘉堂蔵「十王図・二使者図」は製作地と年代について元時代

と高麗時代の両説があるが、このうち「二使者図」は雲に乗って飛来し、その足下には多くの宝が散らされている。こうした飛来する武装神の図像も、元時代に至るまで保存された「行道天王図」の影響を見ることができるともされない。

本稿では図像的類似のみを述べ、なぜ契丹蔵において「行道天王図」が扉絵に選択されたのか、という最も重要な思想的背景に関する考察を行うに及ばなかった。後考を期したい。

(静嘉堂文庫美術館 学芸員)

- (註1) 西脇常記「静嘉堂文庫蔵漢語版本断片について」(付目録)『西脇常記』中国古典時代の文書の世界』知泉書館、二〇一六・初出『文化史学』六九、二〇一三。
- (註2) 榮新江「海外敦煌吐魯番文献見録」、江西人民出版社、一九九六。
- (註3) 次節で述べるように静嘉堂本の断片は台東区立書道博物館蔵の中村不折コレクションの『晋唐屑玉雜卷』(No.170)と類似する。この『晋唐屑玉雜卷』は中村不折の著述から新疆布政使であった王樹枏(一八五二—一九三六)の属令で財務官の梁素文が、新疆省北部の迪化府(ウルムチ)にいた際に集めたものだといふ(鍋島稲子「不折旧蔵写経類コレクションについて」『磯部彰編』台東区立書道博物館所蔵 中村不折旧蔵西域墨書集成 卷下』文部科学省科学研究費特定領域研究〈東アジア出版文化の研究〉総括班、二〇一五)。
- (註4) 前掲註1西脇書、八六頁および前掲註3鍋島論文
- (註5) 『静嘉堂文庫図書登録簿』内の記録の存在は、静嘉堂文庫元司書・成澤麻子氏よりご教示を得た。
- (註6) 前掲註2榮書、一八三—一八四頁
- (註7) 前掲註1西脇書、八八頁
- (註8) 前掲註1西脇書、八八頁
- (註9) Ch/U7731の類似については梶浦晋氏よりご教示いただいた。
- (註10) ①その他 Ch/U7733a,bの類似する図像を有するが細部が微妙に異なる。
- (註11) 挿図8と同頁にもう一体の護法神像が見られるが静嘉堂本とは甲冑を中心に図像がやや異なる。
- (註12) 小林宏光「仏教版画の時代—木版画の誕生と唐、北宋期の発展—」(小林宏光『中国版画史論』勉誠出版、二〇一七)
- (註13) 京都国立博物館蔵本、メトロポリタン美術館蔵本については、梶浦晋氏よりご教示いただいた。
- (註14) 梶浦晋「洪武南蔵から永楽南蔵へ」(京都仏教各宗学校連合会編『新編大蔵経』法蔵館、二〇一〇、一三三頁)

(註15) 京都国立博物館編『宋元仏画』二〇二五に紹介される京都国立博物館蔵「紺神銀字文殊師利問菩提経」(高麗・忠烈王二年/至元十三年・一二七六)。また同書・同展覧会では韋駄天が巻頭に付される京都・宝積寺蔵「紺紙銀字法華経・阿弥陀経」(高麗・忠烈王二十年/至元三十一年・一二九四)も紹介された。

(註16) 前掲註1西脇書、八九頁

(註17) 唐山天宮寺塔の類例は梶浦晋氏よりご教示いただいた。

(註18) 宿白「趙城金藏、弘法蔵和薩迦寺発現的漢文大蔵経残本」(宿白『藏伝仏教寺院考古』、文物出版社、一九九六)、前掲註1西脇書一六〇—二〇頁

(註19) 弓箭と毘沙門天については、「辟邪絵」との関係を中心に、梅沢恵が論じている(梅沢恵「矢を矧ぐ毘沙門天と『辟邪絵』の主題」『中世絵画のマトリックスII』講談社、一九八二)

(註20) 『西域美術』大英博物館スタイン・コレクション2 敦煌絵画2』講談社、一九八二のロデリック・ウィットフィールドの解説。

(註21) 松本栄一「第十節 行道天王図」(松本栄一『敦煌画の研究 図像篇』東方文化学院東京研究所、一九三七)

(註22) 熊谷宣夫「ベゼクリク第四号窟寺将来の壁画」『美術研究』一三八、一九四四

(註23) 大島幸代「四川地域の毘沙門天」(大島幸代『中国毘沙門天造像史』(博士論文)早稲田大学)二〇二五)

(註24) 大島幸代「毘沙門天信仰の変容—弥勒出世による成仏と帝王の理想視」(同右)

(註25) 大島幸代「夾江千仏岩の毘沙門天像」(四川省樂山市凌雲寺大仏と左右龕の毘沙門天像) (同右)

(註26) 『西域美術』大英博物館スタイン・コレクション2 敦煌絵画2』講談社、一九八二にてロデリック・ウィットフィールドは、Ch.0018を唐時代(九世紀) Ch.xxvii.002を五代(十世紀後半)とするが、その根拠は示されない。『西域美術』ギメ美術館・ペリオ・コレクション2』講談社、一九九五の秋山光和の解説は、ウィットフィールドの解説を受け(MG:1766を五代(十世紀)と見る)。

挿図出典

挿図1: 磯部彰編『台東区立書道博物館所蔵 中村不折旧蔵西域墨書集成 卷下』文部科学省科学研究費特定領域研究〈東アジア出版文化の研究〉総括班、二〇一五、六六頁

挿図2: 『俄羅斯科学院東方研究所聖彼得堡分所蔵黒水城文獻』四、上海古籍出版社、一九九七、三六五、三六六頁

挿図3: 『俄羅斯科学院東方研究所聖彼得堡分所蔵敦煌文獻』一五、上海古籍出版社、二〇〇〇、二四八頁

挿図4: 同右、二五三頁

挿図5、6: Digitales Turfan-Archiv (<https://turfan.baw.de/ta/ch.u/ta.chu.index.htm>)

挿図7: 関東局編『旅順博物館図録』座右宝刊行会、一九四三、図版一〇三

挿図8: 同右、図版一〇二

挿図9: 京都国立博物館編『京都国立博物館蔵品図版目録 書籍編 中国・朝鮮』京都国立博物館、一九九六、三四頁

- 挿図10 : The Met Collection (<https://www.metmuseum.org/art/collection/search/44849>)
挿図11 : 山西省文物局『応原木塔遼代秘藏』文物出版社、一九九一、一九頁
挿図12 : 『唐山市豊潤区天宮寺塔出土仏経図録』唐山市豊潤区文物管理委员会他、二〇一〇、
六頁
挿図13 : 中国国家図書館編『第一批国家珍贵古籍名録図録 第四冊』国家図書館出版社、二〇
〇八、八八頁
挿図14 : 『西域美術』大英博物館スタイン・コレクション2『敦煌絵画』講談社、一九八二、図16
挿図15 : 同右、図15
挿図16 : 『西域美術』ギメ美術館ペリオ・コレクション2『講談社、一九九五、図77
挿図17 : 筆者撮影
挿図18 : 奈良地域関連資料画像データベース ([https://www.nara-wu.ac.jp/aic/gdb/
mahoroba/38/bisyanonten/index.html](https://www.nara-wu.ac.jp/aic/gdb/mahoroba/38/bisyanonten/index.html))より朝護孫子寺様の許可を得て転載

〈謝辞〉

当該断片、および經典に付される護法神像の類例については、註に記す通り、梶浦晋氏より重要なご教示を多くいただきました。ここに深い感謝を捧げます。